

清川行人小屋前の石碑群の奥まった所の地中にあった謎のもの、二つ

〔台座〕 神を崇め奉る神道儀式を挙行したのだろうが、何の祭りごとか？



正面



一面



神
心
講

皿
二つ（神饌器）

水
差し（水入器）



仙台市土橋通

志願人

門脇勝次郎

柴山徳治

寄進者
10名

二面



寄進者 24名

三面



寄進者 13名

総計 49 名（宮城県仙台市）の寄進者

〔銅板〕 何かを寄進・奉納したのだろうが、何の祭りごとか？

(前頁、地中下の台座の上に乗せられていた)



人 話 世

奉 納

昭和十年三月吉日

西村山郡岩根澤

社守 古澤栄二郎

東村山郡大郷村船町

秋葉五助

菊池鶴治

鈴木惣五郎

東村山郡大郷村中野

鈴木富治

伊藤寿代

原田五郎

櫻井平七

朱字化・下線引きはき大沼が細工したもの、古澤氏は清川域祭祀を担った別当清川坊代々の当主

「御所王子社」入口の鳥居奉納
に係る竣工お祝いか？

梵鐘（戦中に拠出）奉納に係る竣工お祝いか？

あるいは、両方と関係するのか、様々な組み合わせが考えられる。



上記の二つの神事に鑑みて、中でも特に、「銅板」に刻されている「岩根澤 社守 古澤栄二郎」
(古澤家)に鑑みて考える処がある。 細部は「旧日月寺〔塔 中 本 先 達〕^(清川域・烏川不動滝界隈別当) (清川坊)に残る遺品等」に記述しているが要約する。

次の3点セットを踏まえれば、まさに、当該域(清川道領域)における寄進・奉納やその竣工(完工・完成)に係る様々な神事斎行の祭主・社守、旧日月寺の別当職を担い、代々重要な役割を果たして来たことが窺える客観的証拠である。

- 1 (下表参照のこと) 次の著名な二つの文献——井場英雄著「岩根沢ものがたり」、および、内藤正敏著「修験道の精神宇宙」——に記述されていること。
- 2 (次頁参照のこと) 祭祀・祭儀に係わった遺品・伝承品が当家に残されている(引き継がれている)こと、つまり、祭祀を駆使した証拠の現物が遺されていること。
- 3 (前頁参照のこと) 氏名が刻された銅板が、清川行人小屋前に、つまり、祭祀祭場の中枢部の現地・現場に発見されたということ。 なお、この〔銅板〕は〔台座〕の上に乗せられるように埋まっていたことから、その二つは一体とも考えられる。

内藤正敏著「修験道の精神宇宙」 (青弓社) 73頁	井場英雄著「岩根沢ものがたり」 23頁
「一・・・<u>烏川の上流に烏川不動尊が祀られている。岩根沢の日月寺(現出羽三山神社摂社 岩根</u> <u>沢神社)の</u>^{たっちゅう}^(※)<u>塔 中 本先達の清川坊が別当をして</u> <u>おり、現在も当主の清川(正しくは古澤)栄一氏</u>^{ママ} <u>は毎年六月十八日(正しくは十七日)に赤飯をお</u> <u>供えに行っている。・・・」</u> ^(※) ここでいう塔中(塔頭)とは、旧日月寺(あるいは歴代住職)に代々に渡って仕えて来た筆頭職立場の別当であったという意味合いであろう。	「一^(P23)現に私宅になどにも厨子に安置された大日如来像一体と、不動明王像の他に小さな弘法大師像などが伝わっている。保存されているという家には必ずと言っていいほどに不動明王像があるし、また、日月寺で廃仏とした中にあった不動尊はしかも丈六の不動だったという。・・・^(P25)不動滝は烏川の上流にあり、参拝の場所に登るには、岩を伝わり、水を横切らなければならず、何時の時に奉納されたのか、金梯子などもあった。・・・^(P26)毎年六月十七日、<u>清川坊</u>^{ママ}こと古沢(正しくは古澤)栄一氏によって祭礼が行われる。・・・」

大 沼 香

清川坊の遺品・伝承品



大漁安全
養蚕安全
家内安全所願成
就



火盜消徐
御祈禱御祓
家内安全
岩根沢口



神道教師之印



社司之印

